

教育の質の向上を目指す実践研究
—ルーブリック評価を通じた
園児 3 年間の成長を可視化する—

2022 年 1 月
学校法人明星学苑 明星幼稚園

1. はじめに（研究の背景）

米国のノーベル経済学賞受賞者でもあるジェームズ・ヘックマン教授が長期にわたり行なった「ペリー幼稚園プログラム」により、子どもの将来の幸福、成功に影響しているとされた能力は、IQテストや学力テストで計測されるような認知能力というよりは、意欲や自制心などの非認知能力であることが明らかになったという報告がある。一般的には意欲や自制心が人生の幸福や成功に不可欠だとこれまでもわかっていたことが、この壮大な実験結果により、いかなる幼児教育を選択するかが重要であると明らかになったと言える。

では、どうしたらこの非認知能力が育つのかを当園では教員間で勉強会や研修を重ね、2019年度より明星幼稚園独自のループリック評価(図1)を作成し導入した。今年度、ループリック評価を導入して3年目を迎えるため、年長児(2019年度入園生)は入園から3年間を通してループリック評価を受けることとなる。

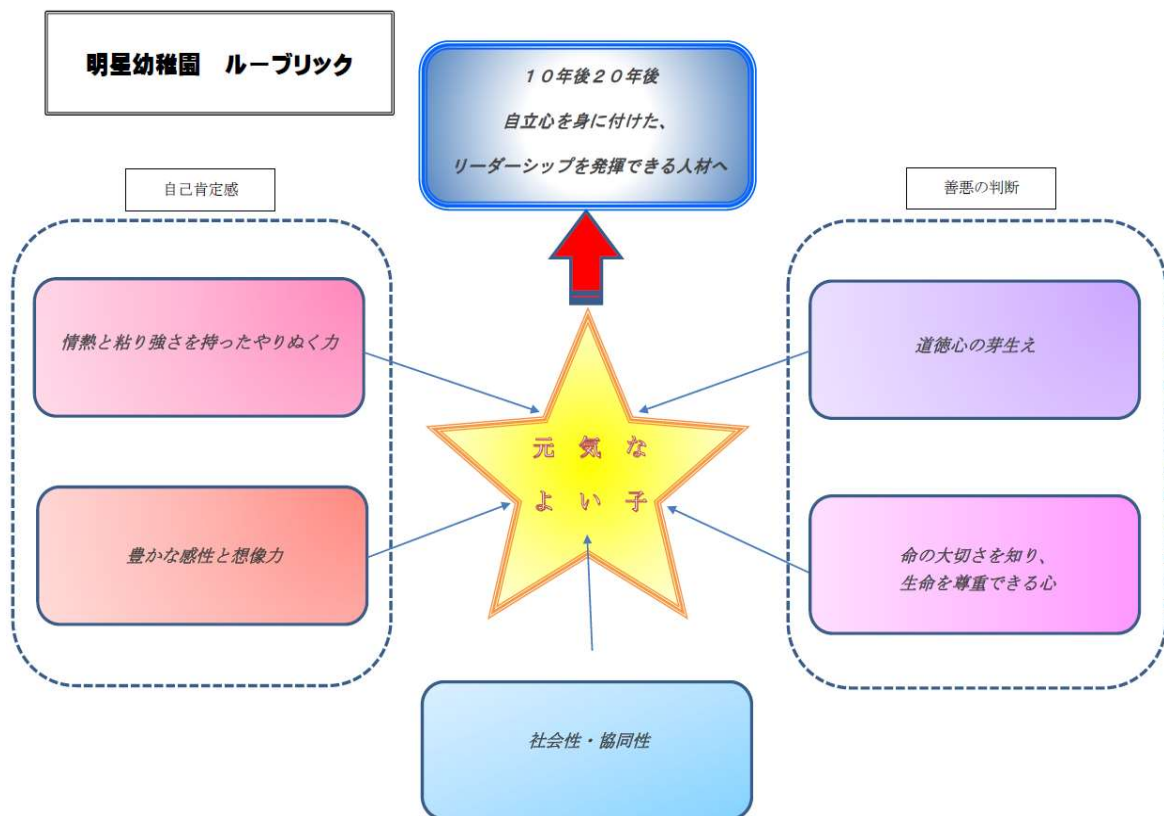


図1 明星幼稚園ループリック評価概念図

また、ループリック評価を行ううちに、園児のループリック評価は園児個人の非認知能力向上を図るだけでなく、クラスや学年で集計することにより園全体の教育改善に活用できるのではないかという考えに至った。数値化された結果から、教員個人ならびにクラスの長所や短所が洗い出されるため、教育改善を検討する際の材料として利活用することを検討した。

そもそも幼稚園という教育現場において、ひとつの指導方法に対しループリック評価を

取り入れているような事例は数件見受けられるが、園児 3 年間の成長をルーブリック評価で評価をしているような事例はほとんど見当たらない。園児の非認知能力のルーブリック評価のみならず、その評価結果を用いた教育改善のモデルの構築ができれば幼児教育における本研究の意義は大きいと考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は大きく二つの目的がある。

一つはルーブリック評価表を用いて園児の非認知能力の成長を、3 年間を通じて可視化することである。これにより、園児一人ひとりの強み・弱みを把握することが可能になる。また、数値によって明らかになった成長度合いを分析することで、園児一人ひとりに合った個別最適化された教育を提供できようになるのではないかと考える。

もう一つは、個別に測定した園児のデータを集団でデータ化することで、クラスあるいは学年の教育効果を可視化することである。それにより各教員が指導上の自分の弱点に気づき、個々の能力向上や研鑽に活用することができるほか、学年単位でのカリキュラムマネジメントの立案に活用することも可能になると考える。

なおルーブリック評価に当たり、小学校以上の教科における学習評価とは意味合いが全く異なる点に注意しなければならない。ルーブリック評価表を用いてこれまで数値で表せなかった園児の非認知能力（生きる力と言われるもの）を数値で可視化し、次の教育アプローチへの指標とするものである。

上記一連を「ルーブリック評価による教育改善モデル」（図 2）として構築し、外部に発信することで幼児教育界の全体的なレベルの底上げを目指すことを目的とする。

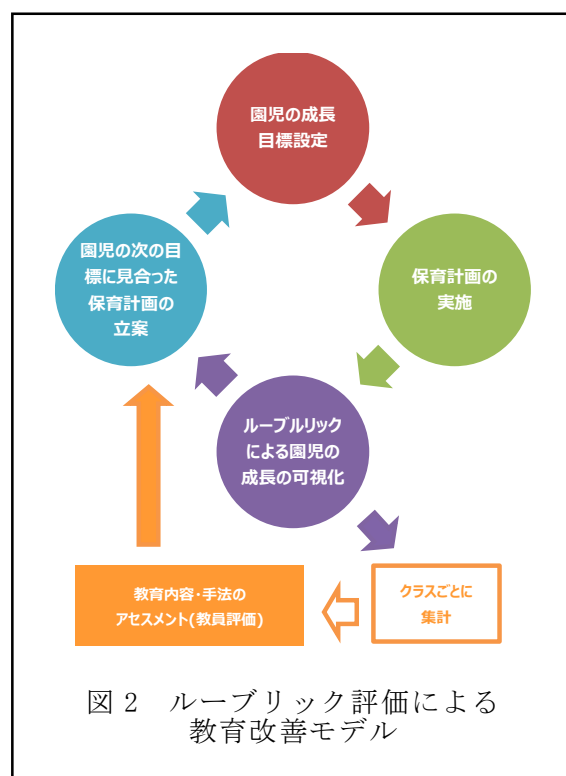


図 2 ルーブリック評価による教育改善モデル

3. 研究計画・方法

3.1 研究計画

研究を実施するにあたり、以下の計画に基づいて行った。

令和3年4月	・年中・年長クラス園児の前年度評価の引き継ぎ
令和3年5月	・ループリック評価表に基づいた教育の実践（教員個人で立案）
令和3年6月	・第1回評価（年少）、傾向分析
令和3年8月	・年長向けループリック評価「3年間のまとめ」様式の検討
令和3年9月	・全日本私立幼稚園連合会 第12回幼児教育実践学会参加 （研究大会で教育手法等に関する他園での取り組み事例調査）
令和3年10月	・ループリック評価勉強会 （各教員の取り組みの振り返りおよび教育改善のための教材検討）
令和3年12月	・第2回評価（年中・年長）、傾向分析
令和4年1月	・成果報告書（概要版）および実績報告書の作成
	・成果報告書（概要版）の送付
	・成果報告書のHP公開
	・次年度に向けた改善計画（教育目標、ループリック評価表等）
	【以下の項目は、報告書提出後に実施予定】
令和4年2月	・第2回・評価（年少・年中・年長）
令和4年5月	・日本保育学会での発表（予定）
令和4年8月	・全日私幼研究機構 幼児教育実践学会での発表（予定）

3.2 研究方法

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」から明星幼稚園オリジナルの6領域を設定し、6領域それぞれの定義を設定。さらに園児の成長に合わせた5段階目標項目（=ループリック評価表）を設定している。それらを踏まえ、2019年からの教育において実践しているが、本年度は以下の方法でさらに研究を進めた。

- ① 公益社団法人東京都私立幼稚園教育研修会研究大会（オンライン）に参加し、業界の動向調査およびループリック評価項目設定や教育手法に関する情報収集を行う。園児の非認知能力を伸長させるような取り組み事例を収集し、当園での導入が可能かどうかを検討する。

- ② ルーブリック評価表に基づき、園児個人の評価を行う。年少クラスは5月(入園時)・10月・2月の年3回、2月の年3回実施する。年中・年長クラスは前年度2月のデータを引継ぎ、その後10月と2月の年に2回実施する。評価に際しては、園児の日ごとの行動により、どこに当てはまるかを点数化するが、点数がどれだけ取れたのかを評価するのではなく、各項目の前回との差異を検証するという観点で園児を評価する。
- ③ ②で評価した点数を前回の評価点数と比較し、伸長項目あるいは伸長が見られなかった項目について検証する。園児の発達段階に応じた特性を鑑み、教員のこういった指導に効果的があるのか、あるいは効果が見られないのかを検証する。
- ④ 園児のルーブリック評価をクラス単位ならびに学年単位で集計し、集団での教育効果を数値化する。クラス(=担任)の強み・弱み、学年の強み・弱みを可視化する。
- ⑤ ④で評価したクラス単位の評価を教員の自己アセスメントとして置き換え、管理職が個人フィードバックを行う。
- ⑥ クラスおよび学年の数値を、「ルーブリック評価勉強会」にて持ち寄り、伸長項目(=成功した教育手法等)を検証する。下降した項目についても検証し、カリキュラムの改善方法について検討する。勉強会の場においては相互フィードバックも行い、グッドプラクティスとして決定する。
- ⑦ 勉強会終了後に Google フォームを用いて、園児のルーブリック評価に携わる教員を対象に「ルーブリック評価に関するアンケート」を実施する。ルーブリック評価に対する教員の意識調査を5件法で行うほか、自由記述による本音の調査を行う。
- ⑧ ④⑤⑥を踏まえ、2021年度後半の保育計画を再検討する。
- ⑨ 卒園時に発行する『すくすく』に3年間の成長のまとめとして、ルーブリック評価の結果を掲載できるように様式を検討する。
- ⑩ ルーブリック評価の一連の作業方法をまとめ、「教育改善モデル」として成果を外部に公表するため、成果報告書(概要版)を作成し都内私立幼稚園約800件に送付する。保護者約100件、法人関係者約100件にも配付し、今年度の成果を周知する。
- ⑪ 成果報告書(本編)は、ホームページで公開する。

4. 研究成果

4.1 当園におけるルーブリック評価表

当園では表 1 に示すように、6 領域に各々 2 つのテーマを定めている。さらに、園児一人ひとりを客観的に評価できるよう、対象園児の目に見える行動や様子を具体的に示した 5 段階（表 2）を策定しており、表 2 のほか全ての領域においても 5 段階を定め、現状に合わせて改訂し運用をしている。

表 1 明星幼稚園オリジナル 6 領域

領域	テーマ
㊦ 社会性、協同性を育てる	① 自分の思いを言葉で相手に伝える ② 友だちとの協同活動に進んで取り組もうとする
㊧ 道徳心の芽生えを育む	① 集団生活に必要なルールや決まりを守る ② 困っていたり、泣いていたたりする子に思いやりを持って接する
㊨ 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる	① 動植物に興味を持ち観察し、世話をする ② 遊具の安全な使い方を知り実践する
㊩ 情熱と粘り強さを持ったやりぬく力を育てる	① 意欲的に取り組み、達成感を味わう ② 出来ないこと苦手なことがあっても逃げずに向き合う
㊪ 豊かな感性と創造力を育む	① 新しいことを創造し表現する ② 発見や工夫を楽しみながら遊びをすすめる
㊫ 自立心を養いリーダーシップを発揮する人材を育てる	① リーダーシップを発揮する ② 物事の良し悪しを判断し、自発的に行動する

表2 「㊦ 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる」の例

項 目	㊦ 遊具の安全な使い方を知り実践する
定 義	遊具で安全に遊ぶために、決められたルールを守るだけでなく、より安全な遊び方を実践しようとする
5	友だちや周囲に遊具の安全な使い方を教えることができる
4	保育者も気が付いていない危険な場所や行為などに気付き、周囲の人々にいち早く伝えることが出来る
3	遊具の正しい使い方や安全な使い方を知っており、ほとんどの場合は安全に遊ぶことができています
2	遊具で遊ぶ時に安全に対する意識が足りなかったり、力の加減、体の動かし方がわからず、危険な遊び方をしてしまうことがある
1	危険な遊び方をします。もしくは遊具で遊ばない。

ループリック評価導入から2年が経過し、3年目が始まる今年度初頭にループリック評価表の検証を行った。例えば、領域㊦「命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる」（表2）では、当初4段階の項目を〈友だちや周囲に遊具の安全な使い方を教えることができる〉と設定したが、この評価に際して現場から「文言が曖昧であるがために評価を困難にさせている」という声が上がったため、〈保育者も気が付いていない危険な場所や行為などに気付き、周囲の人々にいち早く伝えることが出来る〉と具体的に表現することで評価者間の齟齬が生まれにくいように改善した。

なお、ループリック評価については5月に年少・10月に年少・年中・年長、2月に年少・年中・年長で実施（表3）しており、クラス、学年単位で平均値を算出し、前回評価した数値と比較することで教育効果の検証を行っている。

表3 2021年度在籍園児のループリック評価時期

	2019 年			2020 年度			2021 年度		
	5 月	10 月	2 月	5 月	10 月	2 月	5 月	10 月	2 月
年長（2019 年度入園）	★	★	★		★	★		★	★
年中（2020 年度入園）				★	★	★		★	★
年少（2021 年度入園）							★	★	★

※ ループリック評価の方法

- ・年に3回（5月・10月・2月）ループリック評価をクラス担任が各園児につける。
- ・ただし、年中児・年長児の5月の評価は前学年の2月の評価を移行している。
- ・6領域12項目について1・2・3・4・5の評価段階がある。

4.2 園児の評価

ループリック評価を 2019 年度より導入しているため、2021 年度の年長児が初めて 3 年間を通してループリック評価を実施した学年となる。ここでは、ループリック評価に表れる 1 年ごとの成長および 3 年間の成長を読みとっていきたい。

① 2019 年 年少時での成長

●5 月～2 月

入園間もない 5 月と進級間近の 2 月の全 12 項目の平均値を比較すると 0.19 ポイント上昇している。

【平均値が大きく伸びている項目】

「自分の思いを言葉で相手に伝える」	0.65 ポイント
「友だちとの共同生活に進んで取り組もうとする」	0.37 ポイント
「新しいことを創造し表現する」	0.34 ポイント
「発見や工夫を楽しみながら遊びを進める」	0.26 ポイント
「物事の良し悪しを判断し、自発的に行動する」	0.25 ポイント

上記の項目では、初めての集団生活を経験し他の存在に大きく触れ、たくさんのことを吸収している事が伺える。

3 年間の測定をしていく中で、成果の表れている項目は 0.2 ポイント以上の伸びを示すことがわかってきた。つまり、0.2 ポイントは年を重ねることで自然に成長していく度合と言えるのではないだろうか。当園のループリック評価においては微細な数値変化や子どもが年齢を重ね自然に成長した点を、園でのカリキュラムの効果としないよう、+0.2 を基準として着目するようにしている。そこで上記の項目では大きく 0.2 ポイント以上の値を示しており、個々の園児が園生活の中で成長できていることを示している。教員は学年としての取り組みや各クラスでループリック評価の項目を意識して環境づくりや言葉かけ、援助を行っていることがわかる。

例えば「自分の思いを言葉で相手に伝える」の項目では大きな成長が示されたが、その点に注目して考察してみる。教員による毎日の読み聞かせで、物語を言葉で聞く機会が豊富にある。また子どもたちがじっくりと聞くことができる環境設定についても考慮し、指導している。他にも教員は日常から園児の話したい気持ちを受け止め、言葉を補ってフィードバックし、先生に受け止めてもらえた実感した子どもは、安心して自分の思いを伝えることができるようになる。こうした日ごろからの経験の積み重ねや、毎

日の友だち、担任、その他教職員との豊富なコミュニケーションから、子どもたちが学びによって成長をしていると考えられる。

【平均値が伸びていない項目】

「遊具の安全な使い方を知り実践する」	－ 0.15 ポイント
「集団生活に必要なルールや決まりを守る」	－ 0.11 ポイント
「意欲的に取り組み、達成感を味わう」	－ 0.02 ポイント

マイナスの平均値となった3つの項目については、教師の働きかけおよび教育的環境を見直すなど、必要な改善が求められる。個人差を考慮し、一律の指導方法ではなく個別のカリキュラムを考察する必要性がある。

② 2020 年 年中時での成長

●年少時の2月の平均値～年中2月

年中時は子供たちが精神的にも大きく成長する時期でもあり、その中で様々な障害も経験していく。

大きな特徴は10月・2月と2回の項目別の平均値が1項目をのぞいては右肩上がりの数値となり、成長の度合いが大きい。対照的に前述した年少時では、5月～2月で大きく成長しているものの、10月～2月は小さな上昇または下がっている場合もあるが結果的には入園からの2年間で少しずつ緩やかに成長していた事がわかる。

すべての項目において年中2月の数字の上昇は0.2を大きく上回る0.31～0.78ポイントとなり、12項目平均でも0.46ポイントの上昇となっている。要因としては、ループリックの項目と年少時のループリック評価の結果を意識しながら、年中として学年でテーマ（昨年度は「忍者」を取り上げた）を設けた取り組みをし、子どもたちの理解のしやすさ、物事に関わっていく動機づけを行う活動のために、掲示物や教材、それぞれの子どもへのアプローチ方法等に工夫を凝らしていた点があげられる。そうした取り組みにより、集団で過ごす中での気付きや互いの刺激、助け合い、リーダーシップなど成長の幅が大きい。担任はクラスのテーマを子どもたちと決める等、安心して活動ができるようなクラス運営をしていたことも要因となっていると考えられる。

今後、年中2月に評価した時点で伸び幅が少ない項目や個人差の大きい項目は、ポイントを引き上げていくための施策が必要である。学年での今後を見通したカリキュラムが次の年長組へと引き継がれていく。あくまでもポイント増減に注視するだけではなく、子どもたちの普段の様子を観取っていく力が何より必要である。

③ 2021 年 年長時での成長

●年中時の 2 月の平均値～年長 10 月

この研究時点ではまだ 2 月までの結果が出ていないため、10 月までの成長について考察したい。

年中時で大きく成長の様子が見て取れたが、年長ではほとんどの項目が下がっている。要因としては、この時期の成長段階は、年中時までに発達した「自我」がさらに、「他者とのつながりの中（社会的）の自分」として、自ら考え主体的に行動できるように学んでいく過程であることと、最年長として求められる期待が大きいことがあげられる。年中から引き継いだ施策をもとに、個人差に対応することがさらに必要と思われる。

④ 2019 年～2021 年 10 月 年少～年長までの成長

●3 年間の成長

それぞれの学年において成長の特徴があるものの、12 項目の 3 年間（入園時から年長 10 月まで）の平均値をみると 0.52 ポイントの成長が見られた。入園から卒園までの 3 年間で様々な教育的配慮や施策が効果的に働き、成長を促していることがわかる。

表 4 ルーブリック評価 2019 年度入園園児経年データ

	年少時 (2019 年 度)	年中時 (2020 年 度)	年長時 (2021 年 度)	成長値		
	5 月から 2 月の 成長値	前年 2 月 から 2 月 の成長値	前年 2 月 から 2 月 の成長値	入園から の成長 (2 年間)	入園から の成長 (2.5 年間)	入園から の成長 (3 年間)
友だちとの共同生活に進んで取り組もうとする	0.37	0.31	2022 年 2 月に 計測予 定	0.68	0.60	2022 年 2 月に 計測 予定
自分の思いを言葉で相手に伝える	0.65	0.25		0.90	0.81	
動植物に興味を持ち観察し、世話をする	0.17	0.48		0.66	0.69	
遊具の安全な使い方を知り実践する	-0.15	0.37		0.22	0.16	
集団生活に必要なルールや決まりを守る	-0.11	0.51		0.40	0.23	
困っていたり、泣いていた子に思いやりを持って接する	0.19	0.53		0.72	0.36	
新しいことを創造し表現する	0.34	0.46		0.80	0.55	
発見や工夫を楽しみながら遊びを進める	0.26	0.34		0.60	0.53	
意欲的に取り組み、達成感を味わう	-0.02	0.41		0.39	0.36	
出来ないこと苦手なことがあっても逃げずに向き合う	0.16	0.63		0.79	0.77	
リーダーシップを発揮する	0.09	0.78		0.87	0.53	
物事の良し悪しを判断し、自発的に行動する	0.25	0.39		0.64	0.67	
	0.19	0.46		0.64	0.52	

園児への評価について総評をすると、ループリック評価により子どもたちの成長が可視化されるため、カリキュラムへのフィードバックが行える。つまり、カリキュラム上のウイークポイントに気づき、ループリック評価ポイントを引き上げるための施策を加えて行くことができる。また、クラスごとのポイントの差を話し合い、新しい施策・アプローチの仕方などの学びが生まれ、教員同士が情報交換する中で教育の質を高める事が期待出来る。さらには個々の子どもへの働きかけを考察する要因になっている。将来的には保護者と、園児個人の成長を共通認識するツールとなっていくことも可能と考える。1年ごと、または3年間での姿をとらえ、小学校生活へつなげていくものとして、小学校への引き継ぎ資料となることも考えられる。幼稚園（保育所）での成長を可視化することで、教育関係者などや教育関係機関など多方面に子どもを理解し援助するために必要な共通認識ツールとして期待できる。

4.3 教員について

4.3.1 幼児教育実践学会参加（情報収集）

ループリック評価に基づく教育実践の手法に関する情報収集のため、第12回幼児教育実践学会に参加した。

基調講演として香川大学教育学部学校教育教員養成課程准教授 松井剛太氏の「子どもの声を聴く実践と研究：幼児理解、記録、発信のプロセスについて」が、オンデマンド配信にて実施された。講演では、子どもの声に聴き入り、①保育を見直す対話に繋げること②子どもの声の多様性を尊重すること③子どもと対話をするという三つの観点が連動して子どもの声による幼児理解、可能性の理解に繋げることが重要だということが述べられていた。子どもの声による幼児理解という点が、今当園で行っているループリック評価に通ずる視点であり、当園の教育方法に確信が持てた。

また、口頭発表が行われ各教員が分かれて情報収集に努めた。特に北海道の恵庭幼稚園保育教諭 立田祐理氏、札幌国際大学助教授 田村めぐみ氏による「3年間のつながりと積み重ねから捉える保育実践の考察」という発表が印象に残っている。遊びや育ちなどを保育記録によって可視化し、園児理解や保育の質向上につなげる取り組みが多く、多くの保育現場で実践されているが、それらは日々の保育実践を対象にしているため「今、ここにある姿」を捉えているものである。長期的視点に立ち、つながりや積み重ねといった系統的な視点からの整理はあまりされていないため、担任が年度により交代する当園において、担任が代わっても、つながっている保育実践のあり方を考察するという内容は、当園のループリック評価の考え方に非常につながるものである。

4.3.2 ルーブリック評価勉強会（自己アセスメント）

ルーブリック評価が適切に行われているか、研究や反省のために定期的に学年間で話し合いの場を設けているが、今年度はさらに評価項目の文言に運用上不都合がないか、カリキュラムや教員個人あるいは学年の目標に反映できる内容かを検証し、各教員の学級経営における効果と反省点を共有するために勉強会を行った。



ルーブリック評価勉強会の様子

なお、申請段階では、勉強会に専門家をお呼びして最新事例報告および取組みの講評を行う予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響により来園が困難となったため専門家の招聘は中止することになった。

開催日 2021年9月7日（火）

参加者 園長、園長補佐2名、担任9名、事務職員1名

テーマ 2020年度（前年度）ルーブリック評価の結果の考察

当園のルーブリック評価は6領域あり、それぞれに2項目の目標を設定(表1参照)している。以下はそれらから評価の変動が目立った項目についての考察である。領域を□で、項目を■で示している。

a. 年長組担任Aの考察

◆上昇した項目

① 道徳心の芽生えを育む

① 集団生活に必要なルールや決まりを守る

鬼ごっこから派生してドロケイができるまでになった。難易度が上がるほどルールを守ることが必要になり、遊びを通じてルールを考え、身につけることができた。

② 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる

① 動植物に興味を持ち観察し、世話をする

担任自身がアマガエルを育て、その動画を作成。アマガエルは生きたエサしか食べないため、その様子を動画にして食物連鎖について教えた。また、園で飼っている亀に名前を付けて餌やりの場面を見せ、愛着を持たせる工夫を行った。

㊦ 情熱と粘り強さを持ったやりぬく力を育てる

㊧ 出来ないこと苦手なことがあっても逃げずに向き合う

「やるときは本気」というスローガンを掲げ、じゃんけん大会を複数回実施した。当初は「じゃんけんなんて本気になっても意味がない。負けるからやりたくない。」と言っていた子が、このスローガンを掲げたじゃんけん大会で優勝をし、本気になることの大切さについて身をもって体験したという出来事があった。

b. 年長組担任Bの考察

◆上昇した項目

㊦ 道徳心の芽生えを育む

㊧ 困っていたり、泣いていたる子に思いやりを持って接する

コロナ禍において、感染対策により学年内交流会がなかったが、その分クラス内の友だち関係が学年の早い時期からとても深まった。クラスの中での友だち関係が親密になったことにより、自分ができることを教えてあげようとするなど、友だちを助けようとする気持ちが芽生えた。友だちを助け、認められることで自己肯定感が持て、自信につながった。

◆自己省察

2020年度は「なんでも言い合えるクラスづくり」をテーマに掲げていた。トラブルを自分たちで解決し、クラス内や決め事を自分たちで考え、作っていくことを目標とした。担任は子どもたちの見本となるように心がけた。大勢の前では自分の意見が言えない子どもには個別に声をかけるようにし、気持ちを汲み取って聴くことで、徐々に自分の思いを伝えられるようになっていった。また担任のそうした、個々に話を聴く姿勢を真似て、「〇〇ちゃんはどうなの？」と子ども同士でも問いかける場面がみられた。それらの変化により、クラス内で「自分の思いを出しても大丈夫なんだ！」という空気が醸成され、個々の自信に繋がっていった。担任はこの経験から環境設定の大切さを改めて実感するとともに、子ども同士のつながり、担任と子どもたちの信頼関係の重要性にも改めて気づくことができた。

c. 年長組担任Cの考察

◆上昇した項目

㊦ 社会性、協同性を育てる

② 友だちとの協同活動に進んで取り組もうとする

2 学期は運動会、発表会など行事が多かったため、その一連の活動の中で、目標に向かってみんなで取り組むことの大切さを伝えるよう心がけてきた。個人の達成感だけではなく、みんなでやり遂げた時の喜びを感じられるよう意識して取り組んできた。

㊦ 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる

② 遊具の安全な使い方を知り実践する

危険な遊び方、他者に迷惑がかかるような遊具の使い方が見られた時には、個人への注意だけではなく、クラスで話し合いを持つようにした。ルールを一方的に伝えるだけではなく、子どもたち自身が考え、意見を言う場を設けるようにしたこと、主体的に行動する面が大きく変化した。

◆下降した項目

㊦ 豊かな感性と創造力を育む

② 発見や工夫を楽しみながら遊びをすすめる

日々、どのように保育環境を整え、どのような教材を使うか試行錯誤してきた。それぞれに成長が感じられるが、幼児の興味や行動をさらに観察して、一人ひとりに合わせたきめ細やかな設定をすることで、さらに変化をもたらすことができたのではないかと考える。

d. 年中組担任Dの考察

◆上昇した項目

㊦ 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる

① 動植物に興味を持ち観察し、世話をする

コロナ禍初期、分散登園での持ち帰り教材として、学年で「しぜんはかせ」という冊子を作成し、身の回りの自然（ひまわり・イチョウ・稲・セミなど）に興味・関心を持てるよう画像やイラストを入れて数回にわたって配布した。園で再度話することでさらに興味が広がり、日頃の生活の中で自分から疑問を持ったり考えたりする姿が見られるようになった。

年中組のプランターは保育室前に設置してあるため、戸外あそびで全員が外に出るときに保育者が成長に目を向けられるような声かけをすることで、次第に自分た

ちから発芽や生長に気づく姿が見られ、水やりなども積極的に行っていた。毎日必ず目につく場所に置いてあるとよいと感じた。

㊦ 豊かな感性と創造力を育む

㊦ 発見や工夫を楽しみながら遊びをすすめる

zoomの機能を用いて各家庭に「朝のまとめ」を配信した。その際、わらべうたを教材として使ったところ、とても良い反応が見られた。子どもたちは普段あまり耳にしない言葉にとっても興味を持ったようである。その日以降も興味が持続し、繰り返し楽しむ様子が見られた。クラス通信でもわらべうたを継続している旨を保護者に知らせることで、家庭でも実践する方が多かったという報告をいただいた。

◆ 下降した項目

㊦ 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる

㊦ 遊具の安全な使い方を知り実践する

園での活動が活発になり、遊具の扱いにも慣れてくる年中組は、自分の能力を過信したり、危険なことに興味を持ち始めたりする頃と考えられる。そのため自分たちで危険なことについて話し合い考える機会を設けたが、学年の後半では理解していても、危険な事をする場面が目立つようになった。個別に何故いけないのかを話す機会は設けていたが、クラス全体で何故いけないのか、どうして危険なのかを考える場を事前に意図的に設定することが必要と考える。

e. 年中組担任Eの考察

◆ 上昇した項目

㊦ 自立心を養いリーダーシップを発揮する人材を育てる

㊦ リーダーシップを発揮する

コロナ禍において、感染対策のため室内玩具の種類を減らしていた。そのためなのか、新しい玩具を出した際には「何とかして使いたい」「どうしたら楽しくできるか」と、友だちと考えながら、工夫して遊ぶことができた。

㊦ 物事の良し悪しを判断し、自発的に行動する

園生活に慣れ、友だちとの関わりが深まり、物事への興味関心が高まり、自分の判断で後先を考えずに瞬時に行動する年齢でもある。仲間意識の芽生えと成長の過程での不安定な心の揺らぎがあることを理解し、一年を通して子どもの目線に合わせた保育を心がけてきた。

f. 年中組担任Fの考察

◆上昇した項目

㊦ 社会性、協同性を育てる

① 自分の思いを言葉で相手に伝える

発表会では子供たちの意見を取り入れて実践してみた。原作とは違うストーリーになってしまったが、協同して作り上げることの楽しさや喜びを感じ、成功体験のひとつとすることができた。

㊦ 道徳心の芽生えを育む

② 困っていたり、泣いていた子に思いやりを持って接する

困った様子の友だちがいた時、「どうしたの？」という問いかけをしている場面があった。担任が介入せず見守りながら寄り添い、自分で解決まで進められるか、待つようにした。必要に応じて適切に介入するようにしていった。

「ふわふわことば ちくちくことば」を実践した。どんな言葉を言われたら傷つくのか、嬉しいのか、クラス全体で考えたことで、相手の気持ちが考えられるようになり、思いやりが持てるようになった。

g. 年少組担任Gの考察

◆上昇した項目

㊦ 社会性、協同性を育てる

① 自分の思いを言葉で相手に伝える

担任は幼児の言葉を能動的によく聴き、気持ちを汲み、フィードバックすることを1年間繰り返し行うよう心掛けた。その結果、幼児自身が安心して思いを発信し、伝えようとするようになったと考えられる。

② 友だちとの協同活動に進んで取り組もうとする

発表会では、子どもたちの興味や関心を効果的に広げられるよう、繰り返し絵本を読み、保育者自身が子どもたちと一緒に楽しむことで、クラス全員で劇遊びを楽しみ、一人ひとりが意欲的に劇に取り組む姿が見られた。

㊦ 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる

① 動植物に興味を持ち観察したり、世話をする

カブトムシを幼虫から育て、イラストや写真で効果的に興味を持てるようにしたことで、子どもたちは強い関心を持って観察することができた。

また、発表会で取り扱った物語中にタガメの役があったが、保育者も子どもたちもタガメの知識がなかった。そこで図鑑やiPadを活用し、子どもたちと一緒に調べることで生き物への興味関心に繋がった。

㊦ 自立心を養いリーダーシップを発揮する人材を育てる

① リーダーシップを発揮する

一年を通して言葉で自分の思いを伝えられるようになり、自己発揮できるようになった。保育者は幼児を見守りながらも子どもたちに介入しすぎないように配慮し、子どもの様子に合わせて援助や指導をし、子ども同士が育ち合う環境作りを意識していった。

◆ 下降した項目

㊦ 豊かな感性と創造力を育む

① 新しいことを創造し表現する

② 発見や工夫を楽しみながら遊びをすすめる

コロナ禍1年目においては行動を制限せざるを得ず、伸長が困難だったとも考えられるが、それを考慮した遊びやコーナー等の環境設定や遊びの提供が足りなかったことも原因の一つであると考えられる。このことから今後は中期（10月）の評価結果を注視し、カリキュラムを設定することが必要である。

h. 年少組担任Hの考察

◆ 上昇した項目

① 道徳心の芽生えを育む

② 困っていたり、泣いていたたりする子に思いやりを持って接する

「こういうときはどうしたらよいのかな？」と意識的に声掛けをするようにした。道徳意識が希薄であるが、善悪の判断は芽生え始めている年少組では、担任が最初に善悪を決めつけないように心掛け、状況やお互いの思いを汲み取りながら、子どもたちと一緒に考えるようにした。

㊦ 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる

② 遊具の安全な使い方を知り実践する

ループリック評価項目を意識して、丁寧に使い方の指導を行った。クラスで問題意識を共有するようになると、子どもたち同士で教えあう姿も少しずつ見られるようになった。

i. 年少組担任Ⅰの考察

◆上昇した項目

㊦ 社会性、協同性を育てる

① 自分の思いを言葉で相手に伝える

個々のトラブルに対して、保育者が答えを出すだけでなく、園児自身に考える時間を設けた結果、少しずつ行動面に変化が見られるようになった。

㊦ 道徳心の芽生えを育む

① 集団生活に必要なルールや決まりを守る

信頼関係を築くことをベースに、一人ひとりの子どもと時間をかけてルールを教えた。ルールを一方向的に教えるだけではなく、楽しく生活する体験をさせることで子どもたち自身が自発的にルールを守ろうとする姿が見られるようになった。

◆下降した項目

㊦ 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる

① 動植物に興味を持ち観察し、世話をする

クワガタの飼育、プランターでの植物栽培をしていたが、2学期・3学期で育てるものがなくなってしまい、その結果がポイントの下降に繋がった事が反省点である。今後は年間を通じて意識づけができるようカリキュラムを策定していく必要がある。

今回の勉強会の各教員の考察を見ると、ルーブリック評価を導入して3年、教育の効果による子どもの成長を可視化するという新たな観点が加わったことで、より充実した保育が行える環境が整ってきたようである。担任間で効果があった手法や環境整備および改善の余地がある事例などを共有することは、個々の教員が自らの取り組みと他の教員の取り組みとを比較でき、自身の学級経営を多角的に検証できる大変重要な機会となる。さらに教員のレベルアップのみならず、園として次年度にどのような計画、目標を立てるかにも大きな影響を与えているとも言える。

4.3.3 ルーブリック評価勉強会事後アンケート

ルーブリック評価勉強会の後、参加教員に対して「ルーブリック評価に関するアンケート」を実施した。ルーブリック評価導入から3年目を迎え、ルーブリック評価に関する理解がどの程度浸透しているかを確認することが目的である。

なお、教員に対してルーブリック評価に関するアンケートを実施するのは今回が初めてである。ルーブリック評価に携わっている専任教諭を対象に、11名から回答を得た。アンケートは5段階評価（大変良く理解している・理解している・どちらとも言えない・理解していない・全く理解していない）で行った。

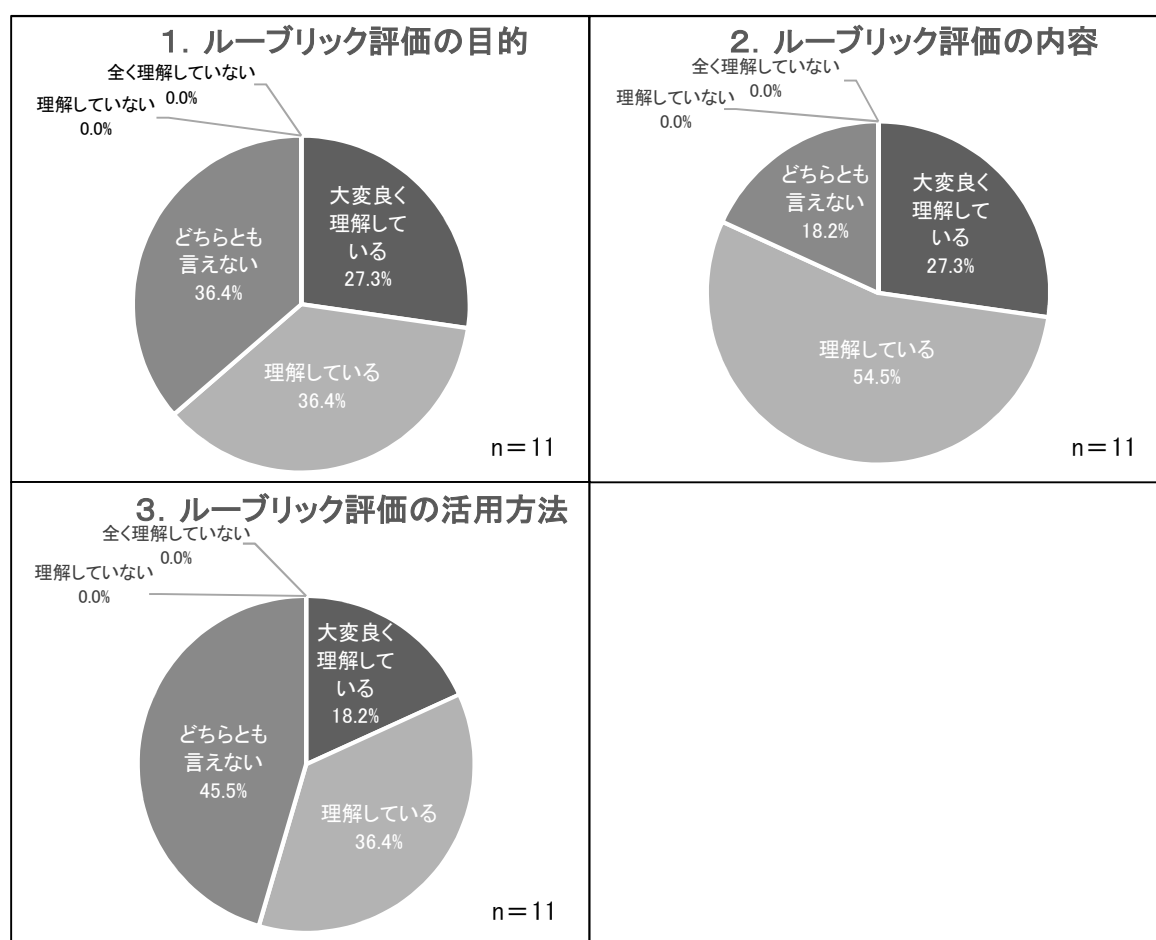


図4 ルーブリック評価に関するアンケート結果

まずルーブリック評価の目的について、半数以上が「大変良く理解している」「理解している」と63.7%が肯定的回答をしている。このことから、ルーブリック評価の目的について大半が理解しているが、一部まだ理解に至っていない教員が存在することになる。この質問における肯定的回答のポイントが上昇しない限りは、教員間の共通認識の醸成が困難になってしまうため、教員全員にルーブリック評価導入の目的・実施に目的を浸透させることが急務であると考ええる。

次にループリック評価の内容については、81.8%が「大変良く理解している」「理解している」と肯定的回答をしている。これは日々の指導の中でループリック評価を実施しているため、高い数値が出たものと考えられる。

また、ループリック評価の活用方法については、「大変良く理解している」「理解している」が54.6%という、3つの項目において一番低い数値が出ている。この数値は目的の理解が進めば活用方法のポイントも紐づいて上昇するものと考えられるため、目的の理解・共有は喫緊の課題であることが分かった。この課題が解決できれば、次年度における保育計画にループリック評価の活用方法を盛り込むことができ、教育改善モデルの構築が可能になるものとする。

なお、上記3つの質問の後に、自由記述として日頃感じていることを記入してもらったところ、以下のような回答(原文ママ)があった。

- ・ループリック評価を作った時に、客観的な評価が出来るようにと作ったはずだが、段々と主観が入ってしまい、つける人によって厳しかったり、甘かったりすることがあるような気がしている。新しく入ってきた方もいるので、もう一度全員でつけかたの再確認が必要ではないかと思う。
- ・先生方によって評価基準が異なり、各クラスで大きなばらつきが出て最終的に考え直したり調整したりしてしまうのは果たしていいのか難しいところだなと感じています。
- ・学年担任がみんなで子どもたちを評価するなど、一人の目ではなく評価できる方法があるといいと思います。
- ・職員間でのより詳しい理解や共有が必要だと感じています。
- ・項目や評価をつける際に基準が人によって曖昧になっている部分があるので、統一していきたい。

半数以上の教員が、ループリック評価のつけ方に関して教員間で共通認識ができていないことを課題に挙げている。常日頃から意見交換をしたり勉強会を開いたりして研鑽を積み、共通認識・共通理解を持てるような状況を作り上げていくことが必至である。

4.3.4 ルーブリック評価勉強会後の実践

今回の勉強会により、保育者がルーブリック評価の観点を意識しながら保育計画を立てることにより様々な教育的効果があったことが確認できたが、同時に反省点や改善点なども見られた。そのため「下降した項目」を重点項目として保育内容の改善を行った。具体的な事例を以下に示す。

㊦ 命の大切さを知り、生命を尊重できる心を育てる

① 動植物に興味を持ち観察したり、世話をする

- ・植物の生長を観察しにくい季節にも興味や関心が持てるように、ニンジンのはたや玉ねぎの球根を水栽培するなどの環境作りを各クラスで行った。また今まで以上にチューリップの球根や大根などの冬物野菜の栽培に力を入れた。（培養土、球根、野菜苗などを購入）
- ・遊びの中で自然に興味や関心を抱いたり、好奇心が育ったりするように、積極的に園庭に植物を植えた。（すすきの苗、四葉のクローバーの種などを購入）
- ・メダカなどの小魚やザリガニ、越冬するクワガタなどの飼育を保育室で行った。また園で飼育しているカメの名前を園児と共に考え、生き物により興味を持たせるようにした。また、飼育している鳩の様子などを積極的に伝えた。（のぼり木、えさ皿、昆虫マットなどを購入）



【年長】カブトムシの幼虫の世話

② 遊具の安全な使い方を知り実践する

- ・クラスや学年で問題意識を共有し、園児が理解しやすいようにイラストで掲示した。また、言葉で伝える際には危険な行為を行った場合にはどんな怪我をするのか、間違えた時に何が起きてしまうかなどと具体的に伝えることで、危機管理の意識を高められるように指導した。

㊧ 情熱と粘り強さを持ったやりぬく力を育てる

① 意欲的に取り組み、達成感を味わう

- ・昨年度の反省で、「年間を通して目に見える環境設定や興味のあるものの提示を行い、興味が継続するよう働きかけていくことが必要だ」という反省が出ていたため、各種玩具について、子どもたちに触れさせ始める時期を育ちや興味によって調整し、「今度はあれをやってみよう」という子どもの意欲を掻き立てられるよう工夫した。

② 発見や工夫を楽しみながら遊びを進める

- ・年長児は集団遊びを好むようになり、ルールや決まりを守ろうとする意識が芽生えていることから、新たにカードゲームを購入し、自分たちで考えながら遊びを展開できるよう環境を整えた。
(カードゲームを購入)



【年長】トータスメダル

④ 豊かな感性と創造力を育む

① 新しいことを創造し表現する

② 発見や工夫を楽しみながら遊びをすすめる

- ・「感性と想像力」を重点として、環境整備や遊具の検討を行った。

上述の教育改善のための取り組みは現在実践中のため、次回のループリック評価時(2022年2月)にポイントが改善されるものと期待している。

5. まとめと今後の展望

本園では2019年度からループリック評価を導入した。実施する中で、いくつかのメリットが見えてきた。まずは、子どもたちの非認知能力を可視化することができ、職員間の共通認識や連携がとりやすくなったという点である。教員間で大切にしていることや育てていきたい子ども像の共有が図れたことは幼稚園としてかなりの強みであると感じる。次に、教員自身の研鑽に繋がっているという点である。ループリック評価を行うことで子どもの育ちや発達段階、あるいは保育計画によっては評価の数値が下がることも考えられるが、自分の保育の振り返りを行う機会となり、適切に対策したり対応を工夫してみようかと考えたりする指標になるため、保育の質が高まったように感じる。また、ループリック評価は子どもたちを比べるためにあるのではなく、あくまでも数値の高い子は評価に沿ってさらに引き上げることを目指すものであり、そのための関わりやそれに向けての援助を行うツールであるため、数値が伸びていない園児に関しては進級時の引き継ぎの際に、どのような関わりをしてきたかなどのアプローチ方法を次の担任に伝え次に繋がる援助を考えていくことで一貫した教育が提供できるものとなる。さらには、ループリック評価を実施していることにより明星幼稚園の意図やねらいが明確になり、保護者に日々の様子やねらいを伝えることや「このような働きかけでここが伸びています」とより具体的な話ができるようになり、家庭との連携も増したことも強みである。

メリットが見られる一方で、運用していく中での課題も出てきている。教員アンケートの結果から、当園で導入しているループリック評価の評価については理解の深さが教員によってまちまちであることが分かった。教員の主観ではなく客観的に評価することがループリック評価の良さではあるが、担任の価値観や子どもとの相性、見る視点などを教員間で完全に一致させることが困難なため、評価する担任によって違いが出るのではないかと不安視する教員もいる。どの教員が評価しても大きな差は出ないように、①評価項目の 5 段階を適切な見直し、②ループリック評価における教員同士の日常的な議論、③近い視点での評価を可能とするための共通認識の形成 の 3 点を日ごろから実施していく必要がある。今年度初頭にも昨年疑問に上がっていた項目について見直した上で運用したが、現行の評価項目および評価段階を選定してから数年を経ているため、評価がつけにくいものや内容を再検討したほうがよい項目が他にもあるという意見が出てきている。言い回しや細かい文言については何度か改定を行っているが、教員間の共通認識を高めループリック評価を意義のあるものにするためにも、項目について定期的に協議していく必要があると感じる。

今回の研究では、園児の 3 年間の非認知能力の可視化ならびに教員の教育力の可視化による教育改善を行ったが、今後の展望としては、保護者に提示し説明を行い理解してもらうことで家庭をも巻き込んだ一貫した教育の展開を視野に入れている。保護者に示し、正しく理解してもらうことで共通認識ができ、家庭における教育指導においても同じ視点で行えるものとする。しかし、1～5 段階の数値での評価は、保護者が小学校以上の教科の評価（通知表）と同様に解釈してしまう可能性が大きい。従って、まとめたものをただ渡すだけではなく、小学校以上の教科における学習評価（通知表）とは意味合いが全く違うということをしっかり理解してもらうことが非常に重要だと考える。そのため、日ごろから保護者との対話を増やしたり、直接保護者と話す場を設けたりする必要があるのではないかと等、保護者まで巻き込んだループリック評価の在り方について検討していきたい。

また、当園では卒園後に系列校の小学校への進学率が毎年 30～40% 程度ある。そのことを鑑み、小学校教育へのなだらかな接続ができるようにループリック評価表の小学校への引き継ぎも検討していく必要があるのではないかと考える。

以上

参考文献

文部科学省（2018）『幼稚園教育要領』

https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf

文部科学省（2018）『幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿(参考例)』

中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 第2回幼児教育部会 配付資料3

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/attach/1364730.htm

中山芳一著『家庭、学校、職場で生かせる！自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』

東京書籍、2020年

中室牧子『学力の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015年

西岡 加名恵・石井 英真 編著『「見方・考え方」を育てるパフォーマンス評価』

明治図書出版、2018年

松井剛太（香川大学 教育学部学校教育教員養成課程 准教授）

「子どもの声を聴く実践と研究：幼児理解、記録、発信のプロセスについて」

第12回幼児教育実践学会基調講演、2021年8月10日～20日（オンデマンド配信）

立田祐理（北海道恵庭幼稚園 保育教諭）、田村めぐみ（札幌国際大学 助教授）

「3年間のつながりと積み重ねから捉える保育実践の考察ー」

第12回幼児教育実践学会口頭発表、2021年8月20日

https://youchien.com/research/meeting/2021/tfpkv10000002kdl-att/materials_2-1.pdf

共同研究者

（代表） 大久保 拓也

伊東 正則

河浦 晃子

飯田 晴子

お問い合わせ、ご連絡は下記までお願いいたします。

教育の質の向上を目指す実践研究
—ルーブリック評価を通じた園児 3 年間の成長を可視化する—
研究報告書

©2022 年 1 月発行

発行 〒183-8531 東京都府中市栄町 1-1
学校法人明星学苑 明星幼稚園
電話番号：042-368-5110 E-Mail：kgwebmas@meisei.ac.jp